

リレー随筆

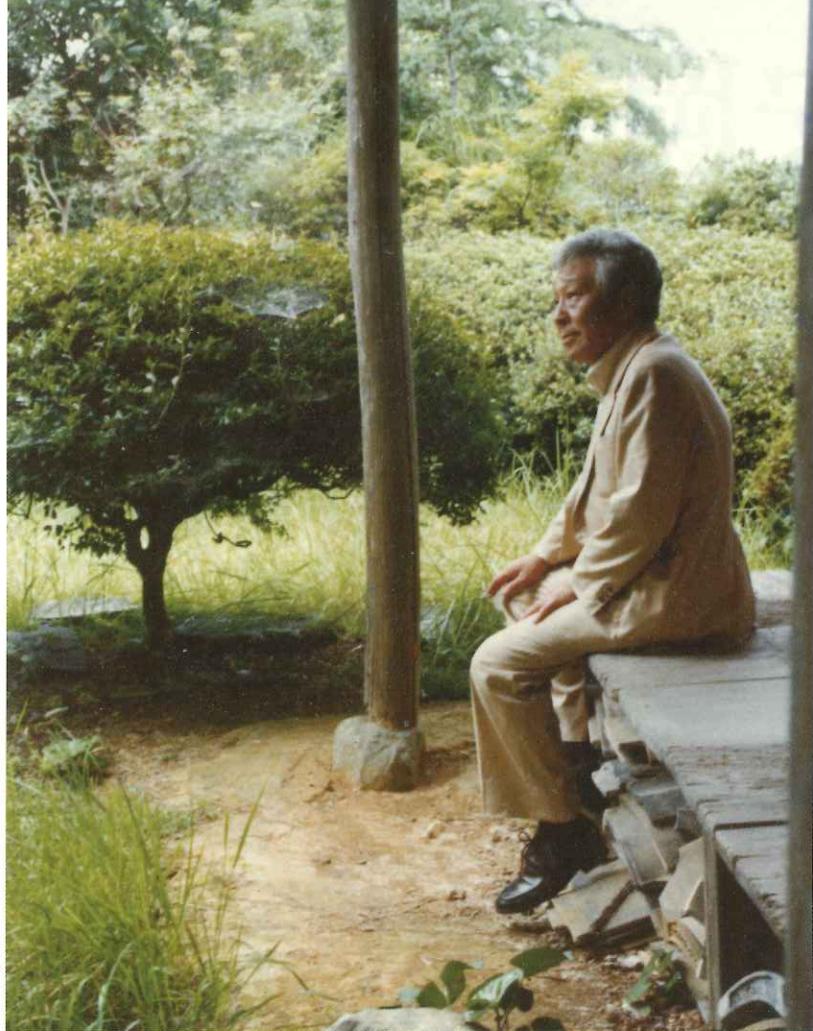
「安岡章太郎展」によせて

安岡 治子

一月二十六日は、父、安岡章太郎の命日である。本年一月二十六日から高知県立文学館で「安岡章太郎展」が開催されたことは、真に喜ばしく、感謝している。今回の展覧会は、土佐の地で開かれるということもあり、特に父と土佐の関係に光を当てて構成されているものと思われる。

父の代表作である『流離譚』は、一九八一年に刊行された。六年近くかけて執筆されたものなので、父が五十代の後半から還暦にかけての仕事である。明治維新前後の安岡の祖先について、特に父の四代前の安岡文助の三人の息子、覚之助、嘉助、道之助が、勤王の志士として、また自由民権運動に関わって、いかなる人生を送ったかを書いた、父としては初めての歴史小説である。

父は先祖代々郷士の家系であり、彼の考える土佐人気質や歴史観は、すべて郷士の側から見たものであろう。『流離譚』を読んでいても、やはり山内家や上士と対立した郷士の子孫の文章だと思わずにはいられない記述が随所に見られる。そういえば当時父は、たまたま、昭和天皇と山内家の当主にそれぞれお目にかかる機会があったのだが、「殿様の前に出たときは、天皇の前に出たときより、よほど緊張した」と言っていた。とはいえ、父は作家としての前半生には、そうした自らの家系や土佐の歴史は一顧だにせず、「自己の精神的独立」なるものを目指して、いわば都会的な小説を書いていた。



▶ 山北（現・香南市香我美町）の父の実家で（神奈川近代文学館蔵）

ただし、父の本当の処女作というべきものは、慶應大学予科時代に出た同人誌に発表された短編「首斬り話」で、これは、吉田東洋暗殺に加わった安木加介の心境を描いた作品である。大江健三郎氏との対談で父は、なぜそんな作品を書いたかについて、次のように語っている。昭和十六年当時、文学をやろう、自分の生涯を文学に投じようすることは、幕末に勤王党に入るようだ」と――。嘉助の姿はその後も、何かというと頭に浮かんだようで、陸軍一等兵の軍隊生活を描いた中編『遁走』（1956年）の主人公の名も「安木加介」であった。

父に歴史小説を書くように勧めてくださったのは、小林秀雄氏だが、氏は生涯のほぼ最後の文庫として「『流離譚』を読む」を遺された。その中で、父が史料と闘いながら新しい強いリズムの文体を獲得したことを指摘されたが、何よりも驚かされるのは、「『流離譚』の最終部の、安岡の家の女二人に流れるクリスチヤン精神に触れて、「作者は十字架へ向かって歩く一人の足取りを辿る。他にどうしようがあるうか」と記されたことだ。この時、父が六年後にクリスチヤンにならうとは、父を含めて誰一人、夢にも思つていなかつたからである。

（安岡章太郎長女・ロシア文学学者）

高知県立
文学館

高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.84

企画展

安岡章太郎展

—〈私〉から〈歴史〉へ

注目の企画展を
ご紹介します!



▲「安岡章太郎とコンタ」がお客様をお出迎え

高知県立文学館の名誉館長でもあった安岡章太郎（1920～2013）が亡くなつて6年を迎えました。当館では、黒井千次さんに編集委員として、神奈川近代文学館に編集企画のご協力をいただき、安岡の生涯と文学の軌跡を紹介する展覧会を3月24日まで、開催しています。

展示内容は、序章「自称『劣等生』の足跡」、第一部作家の誕生、第二部歴史の彼方へ、第三部安岡章太郎と高知、と四つのブロックに分けて紹介しています。

序章では、初期作品の多くの素材となつた幼少期から終戦前後までの足跡を、当時の写真や安岡の文章などによって紹介。

第一部では、自称『劣等生』が花を咲かせ、『私』を基点として、作品のテーマを拡げていった時代と安岡の文学を紹介。

第二部では、大病を経て、晩年のキリスト教受洗に至る後の半生と彼の文学を紹介。

② 安岡章太郎と寺田寅彦
安岡の父方の実家・安岡家と母方の実家・入交家は、ともに寺田家と縁戚関係にあります。

また、寺田寅彦の長姉の婚家・別役家と安岡家は、養子の縁組みを頻繁に行つており、次姉の婚家・伊野部家には、安岡の母・恒の姉が嫁ぐなど、それぞれ血縁関係で結ばれています。

ここでは、安岡が寅彦について書いた文章や、寅彦の日記などを通して、二人の関わりについて紹介しています。

このように見てまいりますと、安岡の文

学の原風景は、この高知にあると考えられます。是非、皆様ご自身でお確かめください。

第三部では、小説やエッセイなどを通じて、安岡が高知をどのように見ていてか、三つの視点から安岡と高知の関係を検証します。

① 安岡章太郎が愛した土佐の風物

高知生まれの安岡ですが、その生活の殆どは県外でした。

しかし、父母の郷里である高知へは、折にふれて帰郷しています。



展覧会を盛り上げる多彩な関連企画も随時開催中！ 詳細は裏表紙のカレンダーをご覧ください。

1.26 土 > 3.24 日

観覧料 ● 500円（常設展含む） 高校生以下無料／20名以上の団体は2割引

身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県及び高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。

（学芸課長／津田加須子）

江戸川乱歩の華麗なる本棚

文豪ストレイドッグス × 高知県立文学館

BUNGO STRAY DOGS



好評のうちに閉幕！

展
覧
会
報
告
！

人気作品「文豪ストレイドッグス」とコラボして江戸川乱歩の業績にせまるる展覧会「江戸川乱歩の華麗なる本棚」が1月14日(月・祝)で閉幕しました。



実際の文豪の名を懐いた魅力的なキャラクター達が活躍する「文豪ストレイドッグス」。今回のコラボ展では、登場するキャラクターのうち、江戸川乱歩や探偵小説に関係性の深い人物を中心に「文豪ストレイドッグス」の魅力的な世界を等身大パネルや複製原画、名言タペストリー、解説パネルでご紹介しました。

また、当館の顕彰作家である黒岩涙香・森下雨村らと江戸川乱歩の関わりを収蔵資料で分かりやすく紹介しました。

展示に関しては、来館者の皆さんに探偵小説の面白さを少しでも体感していた



▲展示風景

だきたいと、展示を観ながら「ある事件」の「鍵」を見つけて事件の謎にせまついく：という謎解き型の展示にしたほか、のぞき穴で旧乱歩邸の土蔵内部を見るコーナー、鏡を使ったトリックが楽しめるコーナーなど、乱歩作品をイメージした展示を心がけ、若い世代の方だけでなく年配の方からも「楽しい」「乱歩と高知の意外なつながりを知ることが出来た」、「涙香・雨村の作品にも興味がわいた」等の嬉しいお声を頂戴しました。

関連イベントも先号でご紹介した平井憲太郎さんの記念講演会のほか、幻の映画「黒蜥蜴」(1968年／松竹)の上映会、森下雨村が乱歩や推理小説全体について所感を述べた貴重な肉声を聴くイベント、

だきたいと、展示を観ながら「ある事件」の「鍵」を見つけて事件の謎にせまついく：という謎解き型の展示にしたほか、のぞき穴で旧乱歩邸の土蔵内部を見るコーナー、鏡を使ったトリックが楽しめるコーナーなど、乱歩作品をイメージした展示を心がけ、若い世代の方だけでなく年配の方からも「楽しい」「乱歩と高知の意外なつながりを知ることが出来た」、「涙香・雨村の作品にも興味がわいた」等の嬉しいお声を頂戴しました。

「このコラボ展のために初めて高知に来た」というお客様も多く、文ストのおかげで全国幅広い層のお客様に当館に親しんでいただくことが出来ました。

この場を借りて、格別のご協力をいただきました文豪ストレイドッグス関係者の皆さま、平井憲太郎さん、立教大学大衆文化研究センター、その他関係者の皆さま、会期中応援してくださったお客様に心より御礼申し上げます。

(学芸課／福富陽子)



▲展示解説風景

常設展示 ゆがね



文学館の常設展示室では、平成31年度にメモリアルを迎える作家の中から、岡本弥太（近現代の詩歌コーナー）、浜本浩（反骨の大衆文学コーナー）、坂東真砂子（現代の文学コーナー）をピックアップし、展示入れ替えを予定しています。（4～6月を予定）。

岡本弥太（若尾瀧水から入れ替え）

展示では、3人の作家の作品や遺愛の品々から生涯をたどります。故郷高知や家族への愛情がうかがえる作品をはじめ、作家たちとの交流等もあわせてご紹介します。



浜本浩（田岡典夫から入れ替え）

B.M. Booth, Major, 1952

高知の近代詩確立の中心的詩人。20歳頃より詩を書きはじめ、「ゴルゴダ」「青騎兵」などの同人詩誌を発刊。教員を勤めるかたわら、43歳で亡くなるまで詩作を続けました。生前唯一の詩集『瀧』は、国内詩壇に高い評価を受けました。

近代詩黎明期の県内詩壇に影響を与えた詩誌「麗詩仙」「贊」や、家族への深い愛情が伝わる詩集「琴歌抄」などを紹介します。



高知新聞社提供

同志社中学部在学中、文学に目覚め、土陽新聞、高知新聞社の記者を経て、「改造」記者として、佐藤春夫や大佛次郎などと親交を深めます。中でも、十代から親しかった竹久夢二や「改造」記者時代から親交のあった大佛次郎とは浜本が作家に転身してからも親交が続きました。改造社を辞めた後に、青春の地・浅草を描いた「浅草の灯」で第1回新潮社大衆文芸賞を受賞。以降も、「オペラ役者」「浅草の鬼」といった浅草ものほか、「土佐のカルメン」や、日露戦争で旅順口陥落に挑んだ土佐の歩兵・四十四聯隊について描かれた「旅順」などの土佐を題材とした作品を書き続けました。

著作の数々から、土佐と浅草を舞台にしました作品を中心ご紹介します。

坂東真砂子

（田宮虎彦から入れ替え）

イタリア・ミラノ工科大学などで建築とデザインを学んだ後、フリーライターを経て、作家デビューします。作品は「死」と「性」を主題とし、「死国」「死神」に代表される土俗的で伝奇的な作風が特徴ですが、初期の頃は、子ども向けの作品執筆にも力を入れていました。

1983年、「ミルクでおいだミルクひめ」で第7回毎日童話新人賞優秀賞を受賞し、以降も児童文学作品を執筆しますが、やがてホラー・ミステリー性の高いものへと作風の変化を遂げていきます。

『桜雨』『山妣』などの文学賞受賞作品や初期の童話作品を中心にご紹介します。

作家の新たな一面に迫ります。
お見逃しなく！（学芸課／野々村昭美）

文学マイスター講座は3月23日（土）より受付開始です。全11回の講師・講座内容等の詳細につきましては、3月23日以降に文学館ホームページでご確認いただくか、または、文学館までお問い合わせください。

文学マイスター講座は3月23日（土）より受付開始です。全11回の講師・講座内容等の詳細につきましては、3月23日以降に文学館ホームページでご確認いただくか、または、文学館までお問い合わせください。

**高知詩人がテーマ！
平成31年度
文学マイスター講座
受講生募集！**

テーマ：「高知ゆかりの詩人を中心に」

開催日時：毎月第4土曜日 14:00～15:30

- 【第1回】4月27日
- 【第2回】5月25日
- 【第3回】6月22日
- 【第4回】7月27日
- 【第5回】8月24日
- 【第6回】9月28日
- 【第7回】10月26日
- 【第8回】11月23日
- 【第9回】2020年1月25日
- 【第10回】2020年2月22日
- 【第11回】2020年3月28日

※12月28日はお休みです。



（学芸課／野々村昭美）



大町桂月三十八年ぶりの帰郷

高橋 正

大正七年の初夏、土佐名物の楊梅が熟し、松魚のたたきが膳にのぼる好季節、大町桂月は文業の閑を得て、三十八年ぶりに懐かしい土佐の土を踏むことができた。

在郷四十日、桂月は自分の雅号ゆかりの桂浜の月を眺め、先祖の墓参りを済ませ、土佐の各景勝地を心ゆくまで探勝した。それは十二歳の少年時に上京して以来、鬱積していたふるさと土佐への限りない郷愁、ノスタルジアの爆発でもあった。

この歌を刻んだ「桂月先生記念碑」が昭和四年、桂浜に建つた。戦後しばらく、この碑の前の浜で中秋の名月の宵、酒仙桂月をしのぶ酒供養の会が盛大に催された。土佐路の桂月は、「おらが国の大文豪帰る」というので、行く先々で大歓迎を受け、連日連夜、強い土佐の地酒に酔い痴れた。料亭得月楼での歓迎会では、ありつけの豆腐を大広間に敷き詰めさせて、芸妓たちに田植えの真似ごとさせながら、盃を呷ったという豪快な逸話を残している。桂月は大正九年の春、二度目の土佐路へ旅立つた。衆議院選に高岡郡から出馬する従兄国沢新兵衛（元満鉄理事長）の応援が目的であつた。その効あつてか当選した。



▲虚空蔵山頂の桂月の文学碑と胸像

その後、桂月は斗賀野と戸波との境にある虚空蔵山に二度登っている。記念の文学碑が昭和五十三年、山頂に建てられた。「予ヶ峯雨より上の岩に臥て雲にほのめく日を仰ぐ哉」と「笠ばかり萱の上ゆく山路かな」の桂月の歌と句が黒御影石に達筆で刻まれている。

碑の右側に日展会友坂手譲のブロンズ製、桂月の胸像があり、三男文男氏（故人）寄贈の由。

昔懐かしい、高知線の鉄道唱歌の歌詞に、「程なく汽車は斗賀野山トンネル抜けて桂月の筆に名を得し勝景の虚空蔵山に遠からず」とあるのも嬉しい。（高知高専名誉教授）

一昨年、吉村淑甫氏（吉村千穎氏の夫）の遺族より、県内外の作家・芸術家と取り交わした書簡などを多数ご寄贈いただきました。吉村氏は初代高知県立歴史民俗資料館館長で、高知の民俗・歴史学者。寄贈資料からは、作家が執筆する際の調査依頼や調査のお礼、近況報告などが見られ、多くの作家との親しい交流を窺い知ることができます。

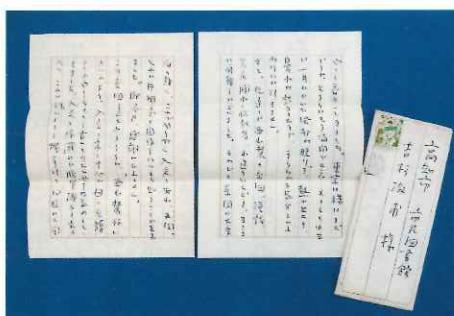
右記資料は、安岡が『鏡川』執筆の際、調査協力を仰いだ吉村氏に宛てた書簡です。書簡には、安岡自身の近況と西山麓の系図、漢詩などの送付のお札が書かれています。特に、西山麓の系図に関して、入交家・西山家・丸岡家・片岡家などの関係を明確に知ることが出来たことの感謝を表しています。また、「西山麓伝」といふより、入交の家を

—寄贈資料から—

吉村淑甫宛 安岡章太郎書簡

1981（昭和56）年3月23日付

封書・ペン書 吉村千穎氏寄贈



資料受贈報告

受贈報告（平成30年11月～平成31年1月）敬称略

▼甲藤幸哉・「甲藤謙他宛寺田寅彦書簡」

▼寺田康彦・「寺田家家紋入り羽織」

▼英保迪恵・「宮尾登美子全集全15巻 宮尾登美子著 朝日新聞社刊」

▼細川光洋・「味覚－清美庵美食隨筆集 大河内正敏著 中央公論新社刊」

▼千葉俊二・「アジア・文化・歴史4号 アジア・文化・歴史研究会編刊」他

▼湯浅篤志・「新青年」趣味別冊（通巻19号）『新青年』趣味編集委員会編刊

▼小松弘愛・「現代生活語詩集 2018 老・若」男・女 全国生活語詩の会編 竹林館刊

▼林亮・「句集 瞭 林亮著刊」

▼永野美智子・「秦の昔話 永野美智子著 リーブル出版刊」

▼河出書房新社・「先生と僕 夏目漱石を囲む人々 青春篇 香日ゆら著 河出書房新社刊」他

▼新潮社・「ドナルド・キーン著作集 第15巻 正岡子規 石川啄木 ドナルド・キーン著 新潮社刊」

▼日本歌人クラブ・「日本歌人クラブアンソロジー 2018年版 現代万葉集 日本歌人クラブ編 N.H.K.出版刊」

▼新潮社・「ドナルド・キーン著作集 第15巻 正岡子規 石川啄木 ドナルド・キーン著 新潮社刊」

▼日本歌人クラブ・「日本歌人クラブアンソロジー 2018年版 現代万葉集 日本歌人クラブ編 N.H.K.出版刊」

▼新潮社・「ドナルド・キーン著作集 第15巻 正岡子規 石川啄木 ドナルド・キーン著 新潮社刊」

▼日本歌人クラブ・「日本歌人クラブアンソロジー 2018年版 現代万葉集 日本歌人クラブ編 N.H.K.出版刊」

▼新潮社・「ドナルド・キーン著作集 第15巻 正岡子規 石川啄木 ドナルド・キーン著 新潮社刊」

▼日本歌人クラブ・「日本歌人クラブアンソロジー 2018年版 現代万葉集 日本歌人クラブ編 N.H.K.出版刊」

▼新潮社・「ドナルド・キーン著作集 第15巻 正岡子規 石川啄木 ドナルド・キーン著 新潮社刊」

▼日本歌人クラブ・「日本歌人クラブアンソロジー 2018年版 現代万葉集 日本歌人クラブ編 N.H.K.出版刊」

▼新潮社・「ドナルド・キーン著作集 第15巻 正岡子規 石川啄木 ドナルド・キーン著 新潮社刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

高知100年文学展

4月より開催！

高知の文学の100年をぎゅっと詰め込んだ、贅沢な内容の企画展です。ぜひ皆様いらしてください。

(学芸課／川島禎子)



高知100年文学展 ～大正、昭和、平成の記憶～

4月13日(土)～6月23日(日)

会期中無休



午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)

高知県立文学館 2F企画展示室
観覧料 400円(常設展含む)
高校生以下無料 ※20名以上の団体は2割引

今年は史上天皇の退位を迎える、平成という時代が終わりを告げる区切りの年です。高知県立文学館では、この記念の年に、大正末から平成まで100年の高知の文学を振り返る企画展を開催します。

日本は第一次世界大戦終戦直後の大正末期から太平洋戦争、敗戦、高度経済成長期、環境汚染、バブル崩壊、そしてさまざまな天災を乗り越え、平成の終わる今年まで激動の時代を歩んできました。文学はその時代の中でさまざまなドラマを紡ぎ、いつも私たちの傍にありました。本を開けば懐かしい記憶がよみがえる方も多いのではないでしようか。

展示は「時と空間を超えて、懐かしい記憶を呼び起こす」をテーマとし、これまで私たちが刻んだ歴史と、その流れの中で高知の作家の歩んだ軌跡を紹介する「時の記憶」、高知の風景を描いた作品を、その時代の懐かしい風景の写真とともにご紹介する「場所の記憶」、香りなど五感を使い心の記憶を呼び起こす「心の記憶」の3つの視点で紹介します。あわせて、皆さんのが語つていただきたいという思いから、参加型展示やイベントなどもご用意しています。

トピックス

「宮尾文学の世界」室より

宮尾文学の世界室では「昨年度より「宮尾登美子の軌跡」と題し、三部構成で宮尾文学を紹介してきましたが、この春から一部展示を入れ替えます。

宮尾文学の芯である自伝四部作についてご紹介している第一部「櫂から仁淀川」、その先の物語」のコーナーはそのままに、第二部では、「宮尾文学に描かれた芸妓の世界」と題し、初期の宮尾作品についてより深い展示を行う予定です。

自身の劣等感をさらけだし、芸妓娼妓紹介業という家業や出生についてありますところなく書いて太宰賞を受賞した『櫂』以降、宮尾は家業にまつわる女性たちを描くことを命題として作品を書き続けました。

一人の芸妓の女としての生き様を、昭和10年頃の花街の因習や情景とともに丹念に描き出した『陽暉楼』、父の日記から掘り起こし物語として紡いだ『岩伍覚え書』『影絵』『夜汽車』、これに連なる作品として『鬼龍院花子の生涯』、宮尾とともに少女時代の一時期を過ごした四人の芸妓の、衰しくもそれぞれに力強い生を描いた『寒椿』。宮尾は『寒椿』連載中の昭和51年2月号の「海」で「小学校も出ないうちに売られた女の子や下層階級の人たちのなかで、私がこの人たちを犠牲にして女学校を卒業したのかとおもうと、うしろめたい気持」であると語り、「恥部をさらけだすことと同時に、罪をあがなうために作品を書かなければいけない」との思いを吐露しています。そのような思いのもと紡がれたこれらの作品には一貫して、哀しい運命にある芸妓一人ひとりに寄り添うようなまなざしが注がれています。



▲1965年 宮尾氏と結婚後、高知市西秦泉寺の新居書斎にて

また、それぞれの作品では、昭和10年代前後の土佐の花街の様子や風俗、満州へ渡った芸妓の様子や行く末など、戦中から戦後にかけての花街の変遷が詳しく描かれており、風俗史としても重要性を帶びています。

展示ではこれらの作品を、直筆原稿や創作ノートなどの貴重な資料や引用パネルなどで紹介します。

また、2005年から2008年にかけ、毎日新聞において連載されたエッセイ「みつめる昭和八十年」の直筆原稿を初公開いたします。このエッセイには、小説作品では脇役として登場する男衆さんや女衆さんにもまつわる細やかな思い出が愛情深く書かれており、「寒椿」の四人の少女のその後の様子も伝わる、大変興味深い作品です。

第三部は「書斎の中の宮尾登美子」と題し、当館に収蔵している膨大な宮尾文庫写真資料の中から、座卓に端座する若き日の姿から、大作『平家物語』執筆のための書斎での姿まで、高知時代から数えて50年に渡る作家活動を、貴重な写真で振り返るコーナーを予定しています。

「宮尾文学の世界」では今後も宮尾文学に迫った展示を行ってまいりますので、ぜひご来館ください。

(学芸課／岡本美和)

猪野睦追悼展

一日常のなかで

会期：2019年4月1日(月)～
2020年3月22日(日)

午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

休館日：12月27日～1月1日
(年末年始のため休館)

場所：高知県立文学館
2階常設展示室 企画コーナー



常設展の企画コーナーでは、高知ゆかりの文学者のメモリアルイヤーなど、折々に多彩なテーマで年間を通して展示しています。平成31年度は、平成30年8月3日に88歳で逝去された詩人・猪野睦さんを偲び、追悼展を開催いたします。

膨大な知識量と詩人ならではの簡潔にして奥深い文章、現地取材を欠かさないフットワークの軽さ、周囲の人を和ませる気さくな人柄で誰からも愛された猪野睦さん。

今回の追悼展では、ご遺族・関係者のご協力のもと、猪野さんの詩人としての業績、作品の数々、研究資料、愛用の品を一堂に展示し、猪野さんが大切に光を当て続けてきた高知詩の流れを次世代へとつなげます。

(学芸課／福富陽子)

猪野睦追悼展のご案内

暖かい日が増え、春めいてきたのを感じる今日この頃。藤並の森での花便りのうれしい季節となりました。

さて、ミュージアムショップでは、安岡章太郎展に合わせ、「安岡章太郎の愛した音楽(モーツアルト・ベートーヴェン)コーナー」に、音楽家モチーフのグッズを入荷いたしました。

こちらのグッズは、誰もが知っているであろう音楽家たちが、ユーモラスなキャラクターになつている「ブラボーシリーズ」というシリーズ作品のグッズです。

見ているだけで明るい気持ちになれる、とても楽しいシリーズですよ。

個人的には、ブラボーマグというマグカップがおおすすめです！ぽってりとした形がとても可愛く、温かいココアが飲みたくなります。ひとつひとつが職人による完全手作りのマグカップ。是非手に取ってみてください。

(総務事業課／植田志帆)

ショップより

館長室から

平成という時代の区切り

岡崎順子

平成という時代が終わりを告げる平成31年春。退位という形で時代の区切りを迎えることは近年稀なことでもあり、新聞記事やテレビのニュースなどでもよく、「平成最後」といった言葉を目にする機会が多くなった。

でも、時そのものには終わりはない。平成が終わってもまた新しい時代が始まるのだし、さらにいえば、私たちの日常生活においても昨日が終われば今日が始まるのだから。

よく考えてみると、区切りとはなんだろう。

もしかしたら、無限の時の流れの中にあって、私たちが限られた短い時間をよりよく生きるために「知恵」なのかも知れない。つまり、私たちは無限の時間の流れに、自分たちにとっての一つの区切りを設けることで、その前で立ち止まり、その期間の出来事や生活を見直し、総括し、リセットする。そうすることで、改めて、新しい明日へ踏み出すエネルギーを生み出しているのではないかと。

さて、当館では、平成の区切りに当たり、大正末から平成までおよそ100年の高知の文学を振り返る企画展を開催する予定だ。

文学は社会を映すもの。高知の文学はこの激動の時代をどう受け止めたのだろうか、その足跡が辿れるだろう。

平成に次ぐ新たな時代。

明日の文学は、平成の時代を経て、どう進化していくのだろう。

より深い世界が構築されていくにちがいない。

企画展 案内

高知県立文学館 カレンダー 2月～4月

高知県立文学館の名誉館長でもあった安岡章太郎(1920～2013)が亡くなられて6年になります。当館では、神奈川近代文学館にご協力いただき、安岡の生涯と文学の軌跡を紹介する展覧会を開催します。特に高知展では、父母の故郷でもある高知をどのように見ていたか、安岡作品を通して検証します。

平成31年1月26日(土)～3月24日(日) ※休館日なし
場所：企画展示室 観覧料：500円

◆クイズイベント

「安岡さんを知ろう。安岡さんてどんな人？」

3月24日(日)開催！

開催時間：10:00～16:00 場所：企画展示室

正解数に応じて素敵なプレゼントがあります。要観覧券

◆展示解説 会期中、毎週土曜日開催！

開催時間：13:30～(30分程度)

場所：企画展示室 要観覧券

☆日本近代文学館 朗読ライブラリー

「安岡章太郎 自作を読む」会期中、随時上映



©新潮社

企画展 安岡章太郎展

—〈私〉から〈歴史〉へ

※展覧会の紹介をしています！
詳細は表紙・2ページ目をご覧ください。

次回企画展 予告

高知100年文学展

一大正、昭和、平成の記憶—

平成31年4/13(土)～6/23(日)

場所：企画展示室 観覧料：400円(常設展示)

平成が終わりを告げる区切りの年に、大正末から昭和、平成まで、100年の高知の文学を振り返る企画展を開催します。懐かしい記憶や風景、香りなどとともに、その時代を映し出す高知の文学をお楽しみください。



イベント情報

◆文学マイスター講座

【第9回】3月23日(土)

14:00～15:30

「寺田寅彦邸の花に想う」(仮)

講師：伊東 喜代子先生
(寺田寅彦記念館)

参加無料・事前申込が必要です。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。

観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bungaku.com

交通のご案内



- 高知駅馬空港より空港連絡バス(県庁前行)「高知城前」下車、北へ徒歩5分または「高知駅前」下車、北へ徒歩5分または「高知駅前」下車、北へ徒歩5分または「高知駅前」下車、北へ徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857



高知県立
文学館